梁啓超の近代観

——思想的矛盾とその展開

王闰梅 著

武汉大学出版社
WUHAN UNIVERSITY PRESS

梁啓超の近代観

——思想的矛盾とその展開

王闰梅 著

武汉大学出版社
WUHAN UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

梁启超的近代意识:思想的矛盾及其展开/王闰梅著. —武汉:武汉大学出版社,2014.7
ISBN 978-7-307-13284-9

Ⅰ.梁… Ⅱ.王… Ⅲ.梁启超(1873~1929)—思想评论
Ⅳ.B259.1

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 092345 号

责任编辑:谢群英 王雪松　　责任校对:汪欣怡　　版式设计:马 佳

出版发行:**武汉大学出版社** (430072 武昌 珞珈山)
(电子邮件:cbs22@whu.edu.cn 网址:www.wdp.com.cn)
印刷:武汉中科兴业印务有限公司
开本:720×1000 1/16 印张:22.75 字数:325 千字 插页:1
版次:2014 年 7 月第 1 版 2014 年 7 月第 1 次印刷
ISBN 978-7-307-13284-9 定价:37.00 元

版权所有,不得翻印;凡购我社的图书,如有质量问题,请与当地图书销售部门联系调换。

凡　　例

梁啓超の著作の引用については、『飲冰室合集』（1932 年初版。参照したのは1989 年発行の中華書局影印本）によった。引用箇所については、『飲冰室合集・文集』は『文集』、『飲冰室合集・専集』は『専集』とし、その巻数・頁数を附記した。

序　文

王閏梅氏の本著は、2010 年に名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出された氏の博士学位論文に加筆修正を加え、まとめたものである。氏のこれまでの地道な努力の成果がこのような形で上梓され、今後の新たな、そしてさらに充実した研究への足がかりが築かれたことを、氏のかつての主指導教員として、まずは率直に喜びたい。

本著は、中国近代史を代表する文人、梁啓超に関心をもつ専門研究者のみならず、より広く、東アジアにおける中国近代化の歩み、とりわけその必然的な系として日中関係に関心をもつ研究者にとって、極めて刺激的な視座を含んでいる。また、現在、日中近代の比較文化研究をテーマに博士論文に取り組んでいる学生たち、若き研究者の卵たちにとっては、自身がこれから到達すべき一つの目標として、モデルケースとして、本著から学ぶべき点が多々あるにちがいない。

この理由から、以下に、本著を読む若い研究者たち、とくに博士論文執筆中の若い学生たちのために、ごく簡単にではあるが、本著の内容の概略を記し、本著を自身の研究にどのように役立てるべきか、その道案内を務めることによって、序文に代えたいと思う。

本著は、序章でまずテーマ設定の意図、先行研究、方法論につ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いて述べた後、第一章でまず、日本で明治初期に定着したpolitical economyの訳語「経済」に対する梁啓超の抵抗・反発と彼の経世済民理念との関係について分析・考察している。明治維新後の日本で、近代化のために盛んに行われた欧米書籍の翻訳は、多くの新造訳語を生んだ。近年、これらの訳語成立事情に関する研究、その日中比較史などに関する研究が増えているが、著者はむしろ、本来的に伝統的儒学の理念を表す「経済」という言葉への日中知識人の立場の違い、思い入れの違いに注目しており、そこに、近代化を実現するに当たっての中国的な葛藤が浮き彫りにされている。

第二章は梁啓超の近代的ジャーナリズム活動における基本戦略と中国的通弊である付会論および「新文体」、「文界革命」提唱との関係を探る。ここでも、近代日本のジャーナリストの代表者である福沢諭吉の文体観や日本の近代文体成立過程（いわゆる言文一致運動）との比較によって、梁における儒学的士大夫的「文」の伝統の拘束力と、そこに根ざす近代化への困難が、多くの資料をもとに示されている。

第三章では、梁啓超の台湾訪問に焦点を当て、現地視察の幻滅と旧台湾文人との漢詩による交流体験がもたらした梁の政治的立場の再確認、さらには以降の漢詩文学観に及ぼした影響について分析している。この章は中国関係の学術誌として定評のある『中国研究月報』（2009 年 12 月）に掲載された論文を骨子としており、当時日本の植民地統治下にあった台湾の旧文人たちとの交流が、梁啓超に清朝的大同的政治理念から漢民族の近代国民国家理念への転換を促した可能性について、説得力のある筆致で論述している。著者は、近代帝国主義への道を歩み始めた日本、その統治下に置かれた台湾の漢民族、そして近代化をめざす大陸中国、という当時の東アジアの構図をマクロの視座から捉えた上で、資料細部の分析によって梁の思想の微妙な変化を裏づけてい

くという方法をとっており、それが比較文化研究の面白さを読者にも十分伝えうる成果を挙げている。

第四章では、日本亡命を契機に小説の政治的機能に着目した梁啓超が「小説界革命」を展開するなかで追究した政治と文化の相関性と、その基底をなす士大夫的心性を論ずる。ここでも著者は、梁のこの運動のきっかけとなった日本の政治小説の動向、とくに明治十年代後半から二十年代にかけての具体的な流れを踏まえた上で、梁の日本からの影響とその受容の限界を、中国の伝統的政治・文化意識との葛藤と関連づけて分析している。

最後に第五章では、梁啓超の全著述活動について、これまでしばしば指摘されてきた矛盾の背後に、中華文明と西洋文明との理想的接合・宥和を求めて腐心する彼の思想的営為の一貫性を探り当て、最晩年の「再造文明」論にその終着点を見ている。梁が晩年に至るまで、西学の位置づけ、中国文明と西学とのあるべき位置関係を模索し続けたことは、ある意味で彼の旧文人的、前近代的心性を窺わせるものである。しかし、その枠内において梁の生涯の活動を通観するとき、逆に、その枠を破ろうとする梁の試行錯誤の軌跡には、困難な時代に生きた一個の文人の限界だけではなく、一貫して堅固な思想的意思が窺われる。著者はここに、今日において梁啓超を研究する一つの意義を見出しているように思われる。

以上に述べたように、王閏梅氏の本著は、大量の資料収集・精読をもとにした地道な実証研究を生産的な比較文化研究へと導く方法について、多くの示唆を与えている。もちろん、かつての主指導教員としては、氏が今後、本著を出発点として、ここで独自に主張された論をさらに発展させ、端緒的に得られた知見をさらに深めてそこに組み込んでいくような、新たなる展開を大いに期待している。

最後に付言すれば、王閏梅氏の比較文化研究の方法は、わたしの夫、前野佳彦が主宰する博士後期課程学生とポスト・ドクトラル（博士学位取得者）のための私設研究組織〈文化記号塾〉において、氏がそのゼミに積極的に参加し、直接的に彼の指導を受けたことによって、急速に錬磨された。〈文化記号塾〉が育てた博士学位取得者はすでに十名を越えており、優れた博士論文を完成した学生は、氏のほかにも数多く存在する。このような塾生たちが、それぞれに大学での職場を得て活躍してくれることが、わたしたちにとって大きな喜びであることは言うまでもない。とはいえ、学生時代とは異なり、大学教員として研究と教育を両立させるためには、研究への真の興味・関心と日々の努力が必要不可欠である。忙しさに追われる毎日のなかで、いわゆる形式的な〈業績〉を積み重ねるのではなく、自身の研究と静かに向き合う時間をどのようにして確保するのか。研究者としてのこの基本的な問いを、おそらくは今日の多くの大学教員が共有している。本著の出版が、王閏梅氏自身にとって、この問いに積極的な答えを用意するものであることを、わたしは信じている。

前野みち子
名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授

目　次

序章…… 1
1. テーマの設定と方法的基軸…… 1
2. 先行研究の検討 …… 6
3. 論文の構成 …… 12

第一章　梁啓超の経世済民理念――「経済」という用語への拘泥をめぐって …… 16
はじめに …… 16
第1節　訳語としての「経済」の成立 …… 20
1.1　日本における「political economy」の訳語「経済」の成立…… 20
1.2　清末中国読書人とpolitical economyの翻訳 及び訳語「経済」の輸入 …… 24
第2節　梁啓超の訳語「経済」への反発とpolitical economy への理解 …… 29
第3節　梁啓超の「経世済民」理念 …… 41
3.1　清末の学術動向と梁啓超の学問構成 …… 41
3.2　梁啓超の「孔子」解釈 …… 52
3.3　梁啓超の「学問」解釈 …… 56
むすび …… 65

第二章　言論活動をめぐって …… 68
はじめに …… 68
第1節　ジャーナリズム運動概観 …… 69
1.1　ジャーナリズム活動の主旨 …… 70

1.2　黄金期における中心課題 …… 74
1.3　ジャーナリズムの手法 …… 78
第2節　「新文体」における梁啓超の主体性をめぐって …… 94
2.1　梁啓超の作文態度 …… 94
2.2　「文界革命」をめぐって …… 100
2.3　「新文体」の日本からの影響について …… 110
むすび …… 118

第三章　植民地的近代と詩社的伝統意識の乖離——梁啓超の台湾訪問をめぐって …… 120
はじめに …… 120
第1節　意気鷹揚台湾へ …… 122
1.1　台湾行の契機と目的 …… 122
1.2　道中から眺めた中国、中国台湾、日本 …… 127
第2節　見事な幻滅 …… 127
第3節　旧台湾文人たちとの交流 …… 131
3.1　日本語に対するスタンス——旧台湾文人とのすれ違い …… 131
3.2　旧台湾文人との漢詩による交流——漢詩による民族主義の体験 …… 135
第4節　梁啓超の漢詩観における変化——「政治性」から「文学（文化）性」へ …… 138
4.1　「詩界革命」とその前後 …… 139
4.2　台湾体験とその後（辛亥革命後） …… 145
むすび …… 153

第四章　小説における梁啓超の近代意識をめぐって …… 156
はじめに …… 156
第1節　小説というメディアの発見 …… 158
第2節　日本の政治小説の手本 …… 160
第3節　小説界革命 …… 165

第4節　政治と文化の相関――『新中国未来記』を通して…… 171
第5節　言葉と文体意識…… 176
むすび…… 181

第五章　梁啓超の中国・西洋文明対応をめぐって…… 183
はじめに…… 183
第1節　中・西文化「結婚」論――『新民叢報』期を中心に…… 186
1.1　亡命以前、変法期…… 186
1.2　『新民叢報』期――中・西文化「結婚」論…… 189
第2節　大戦後の中・西文明認識――『欧遊心影録』を手掛りに…… 206
2.1　科学万能の夢…… 208
2.2　人生観…… 211
第3節　「再造文明」…… 218
3.1　「再造文明」のその一：現代に相応しい「優美な人生観」の樹立…… 219
3.2　「再造文明」のその二：中国伝統学術を科学化する…… 225
第4節　「新民」から「青年」へ…… 233
むすび…… 236

終章…… 239

資料・参考文献…… 255
【一次資料】…… 255
1. 単行本…… 255
2. 雑誌…… 257
【二次資料】…… 257
1. 単行本…… 257
2. 論文…… 261

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

【辞書類】 …… 264

付:『清末の言論・出版界と日本留学生』 …… 265
はじめに …… 265

第一章　中国近代史に登場した日本留学生 …… 269
第1節　日本への留学生派遣まで …… 269
1.1 「西学」の意味内容の変化 …… 269
1.2 中国国内における日本語書籍翻訳の提唱 …… 270
第2節　日本への留学生派遣政策の確立 …… 274
2.1 留学生政策の確立 …… 274
2.2 日本留学生の特徴 …… 279

第二章　中国言論界の二人のリーダー …… 280
第1節　厳復 …… 280
第2節　梁啓超 …… 293
第3節　日本留学生魯迅を通して見た厳復と梁啓超 …… 310

第三章　日本留学生による翻訳・出版 …… 321
第1節　留学生の翻訳・出版団体 …… 321
1.1 訳書彙編社 …… 321
1.2 湖南編訳社 …… 325
1.3 教科書訳輯社 …… 326
1.4 その他 …… 326
第2節　留学生の翻訳 …… 327
第3節　留学生の雑誌・著述についての考察 …… 332
3.1 雑誌についての考察 …… 332
3.2 革命パンフレット …… 335
終わりに …… 344

参考文献 …… 349

序　章

1. テーマの設定と方法的基軸

本研究の目的は、梁啓超の生涯における幾つかの事象を通して、彼の思想的中枢を把握することである。清朝末期から民国期にわたり、知識人たちは中国を西洋の侵略から守るために「救国」運動を展開したその背後にあった矛盾に満ちた思想的営為について、梁啓超を中心に考察することにより、中国的「近代」思想の一側面を明らかにしたい。

現在の梁啓超研究において、梁に対する見方は真二つに分かれている。かなり一般化している観点によれば、「梁啓超の学術興味は大変広いが、その思想は皮相的かつ駁雑で一つのはっきりとした脈絡がない。また深く価値のある思想的内容がないため、一ジャーナリストと言えるだけで、独創的見解のある思想家とはとうてい言えない」①。これは当の本人がかつて自身に下した次のような評価を思い出させる。「梁啓超は広くかつ浅いことを求めた。ある学問が、いささかでも自分の専門に関わるならば、すぐ評論の対象とした。ゆえにその著述は、曖昧模糊として、好き加減で大雑把な話が多く、甚だしい場合には、全く誤りであることもある」②。またもう一方の評価としては、「もしわれわれが梁啓

---

① 李沢厚『中国近代思想史論』（人民出版社，1979 年）、耿雲志、崔志海『梁啓超』（広東人民出版社，1994 年）、賴建誠『梁啓超的経済面向』（聯経出版，2006 年）を参照。

② 梁啓超『清代学術概論』、『専集』34、65 頁。

超の思想に一貫性があり、しかも深刻であることを認めるならば、従来の梁啓超の思想が雑駁で皮相であるという認識は誤解であるだけではなく、批評者自身の考えが偏っていることを表明している」① という。しかし、梁の歴史的影響力については、「梁啓超の啓蒙思想は、当時において、甚だしくは辛亥革命以後においてすら、巨大な影響を生み出した。毛沢東や郭沫若などを含む、まるまる一世代の青年は、すべて梁啓超の影響を受けた」② と言われるようにほぼ異論はない。

これらの評価は、どちらも厳密な実証分析を基に下されている。しかしながら、ひとりの歴史的人物に対して、このように真っ向から対立する評価が下されるケースは、中国近代史において恐らくそう多くはないだろう。

梁啓超は1873年に澳門の西に位置する広東省新会県に生まれた。新会は彼自身が「宋・元の境目にあたり、われ黄帝の子孫が北狄の異種と血戦して勝てず、君臣が国に殉じ、自ら崖山に身を沈めた」③ と述べているように、南宋滅亡の悲劇の地、崖山で有名なところである。「三十自述」に記しているように、父は「生員」にもなれずに私塾教師を生業にしたから、梁啓超は貧乏な田舎インテリの家の出である。幼少時から神童の誉れが高く、11歳で「生員」、16歳で早くも「挙人」となった。この間に科挙向きの勉強のみならず、時流の「訓詁詞章」の学問にも励ん

---

① 例えば、黄克武が従来の梁啓超に対するこのようなネガティブな評価に対し、梁の墨子学研究を中心に実証的な分析を行い、このようなポジティブな評価を下している（黄克武「梁啓超の学術思想：以墨子学為中心之分析」、『中央研究院近代史研究所集刊』1996年）。一方、黄のこの評価に対し、頼建誠が同じく主に経済関係を中心に梁の墨子学研究を考察して反論を述べ、従来の梁啓超評価を堅持している（頼建誠『梁啓超的経済面向』聯経出版，2006年）。

② 李生「人物志」、『二十世紀中国哲学』第2巻，華夏出版社，1995年，52頁。

③ 梁啓超「三十自述」、『文集』11、15頁。

だという。後に康門に入り、康有為に協力して変法活動に奔走し、『時務報』で一躍言論界のスターとなった。戊戌変法期に西太后のクーデーターに遭い、難を逃れて日本で14年間の亡命生活を送った。そこで西洋知識・思想に多く触れる機会を得、思想世界が大きく拓かれたことにより、『清議報』や『新民叢報』、『新小説』などの誌面で救国をめぐって多岐にわたる思想の展開を見せていた。そして辛亥革命後に帰国し、民国政府の司法総長や製幣局総裁また財政総長を歴任したが、途中で袁世凱の帝制運動や軍閥張勲による清朝復活劇に反対する運動にも参画した。1917年末に政界から身を引き著述と教育活動に専念するようになり、1929年に数え年の57歳で北京で病没した。決して長いとは言えない一生に約1千4百万字あまりの著述を残している。

梁啓超の生きていた時代の全般的性格について概略しておこう。その生まれた年より少し遡って見てみると、アヘン戦争に先立って白蓮教の乱（1796—1805年）と天理教の乱（1813年）があった。それに続いて、アヘン戦争、太平天国（1850—1864年）が起こり、清朝社会に蓄積されてきた各種の矛盾と異質文明の侵入に加え、清末は中国が有史以来に経験したことのない大動乱時代となった。そこでは反封建主義・反帝国主義が次第に時代の基調となり、社会的政治的現実との関わりが薄いとされた考証学が乾隆・嘉慶（1736—1820年）の全盛期を経て変質を遂げつつあった。時代の打開策として新しい指導的基礎理論が求められたが、現われたのは復古志向の公羊学であった。頂点に立つはずの伝統的な「中華」の観念と、自分たちが西洋を中心とする国際社会の下位にあるという現実とをいかに折り合わせるかは、清末の知識人すべてに突き付けられた大問題であった。その折衷のための代表的なパラダイムが、中華の精神を本体として西洋の技術を利用しようという「中体西用」論であった。しかし、日清戦争における清朝の見事な敗戦がそれでは問題解決にならないことを証明された。そこで康有為が考察したのは公羊学の「三世説」を用い、伝統中華と近代西洋の文明的前後関係を統一的に把握す

ることにより、西洋受容を可能にする「康学」の道であった。梁啓超は中国の問題を解決する指導的方針としてそれを受け入れ、康有為の弟子となった。

しかし、結局は儒学の再・イデオロギー化に収斂する公羊学復古が、考証学に内在する客観的近代実証精神と矛盾対立していることは明らかである。それは近代への突破口を探し求めていた梁啓超にとってまったく予想しなかったものだったであろう。この復古的前近代イデオロギーによる地場の近代精神の抑圧が中国近代思想史における最大の問題であるといえるならば、梁啓超が変法で切り拓こうとしていた中国の「近代」は、西洋近代と異なる中国的「近代」であった。

この時代の中国政治思想には、新しく「国民」として生まれかわるために旧い自己を否定しようとする自己否定と、侵略的な西洋帝国主義に対してあくまで自己を守っていこうとする自己主張の二つの矛盾する動向が常に絡み合っていた。ここでは、西洋が、師にして仇敵という二重のものとして立ち現われていた①。

梁啓超の思想的特徴は、変わりやすく「無定見」な点にあるとよく言われる。時代状況が刻々と変化すると、それにしたがってその対応策も刻々と変えていかなければならない。梁啓超は論を展開する際に常に国情と時代的要請に応じて思考していた。これはまた儒教的経世済民に基づく彼の政治的スタンスによるものだったと思われる。

本著では、以上のような観点から、先行研究の具体的な成果を十分に参照対象としながら進めていきたい。しかし、その際にそれら先行研究の概念的な枠組みからはひとまず距離をおいて、梁啓超の残したテクストを実証的に考察し、また彼の事績にも注意をはらいつつ、という方法で論証していきたい。つまりこうしたある意味初心に戻るやり方を通して、梁の「思想」の生成過程

---

① 島田虔次『中国思想史の研究』東洋史研究叢刊 59（改装版），京都大学学術出版会，2005 年改装版，525-526 頁。

というものを追跡し、よってその思想的中枢への接近が期待できると思われる。したがってまず参照されるべきは一次資料であり①、その中に潜在する思想的営為そのものの構造を解明することであると考えるのである。

佐藤慎一は清末思想史を構成する場合の主要なアプローチの類型として、一つは洋務・変法・革命という段階区分を設定し、狭義の政治思想の発展過程として構成するもの、二つ目は伝統思想の変容、再編、解体の過程として構成するもの、さらに三つ目は西洋思想の受容規模の拡大、多様化の過程として構成するものに分けている②。中国を西洋列強の手から守り、「近代」的社会へと移行するための打開策を一生「思索」した梁啓超を見る際にも、このようなアプローチの仕方が役に立つと思われる。つまり、梁啓超を実際の政治思想の発展過程の中（もちろん清末に限定しない）に置いてその軌跡を追うとともに、文明史的観点から、中国・西洋思想と文明への対応の仕方をも視野に入れて見なければならない。

中国の近代において、中華世界は有史以来初めて自己に同化しない異質の優れた文明体系の攻撃に遭った。自己の世界、文明体系を保持するためには相手の文明を受け入れて自己を補強せざるをえなかったが、そこに抵抗と受容の葛藤が生じた。文明史的観点の転換という点で、梁啓超の功績が西洋近代文明の受容による中国伝統文明の再構築にあったことはいうまでもない。「経学革命」「史学革命」「詩界革命」「小説界革命」などの提起はその

---

① 主に『飲冰室合集』（中華書局，1932 年初版，1989 年影印本）に収録されたものと、そこに漏れたものを夏晩虹が集めた『飲冰室合集集外文』（北京大学出版社，2005 年）、そして丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』（上海人民出版社，1983 年）、さらに梁啓超が手掛けた雑誌や書簡が挙げられる。

② 佐藤慎一「清末啓蒙思想の成立（一）（二）（三）—世界像の変容を中心として—」（『国家学会雑誌』、92 — 5・6，93 — 1・2、1979 年，1980 年）、「儒教とナショナリズム」（『中国—社会と文化』1989 年）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com